

ご隠居・伊能忠敬

第10回

郷土史研究会会員

二子石 三喜男

(草部出身 熊本市在住)

消えゆく忠敬の高森での足跡

前号のつづき



▲高森高校の公開授業で、高森測量のことが書かれた国宝の忠敬日記を3年生に説明する筆者

忠敬が苦闘を重ねながら実測測量を行って作製した日本列島の地図や全国の街道筋の測量記録、地形などを書き込んだ絵図、さらに、17年間にわたる測量の全行程について51冊にまとめられた測量日記などは、現在千葉県香取市の伊能忠敬記念館に保存されており、平成20年に国はこの日記を含む2,345点の関係資料を国宝に指定しました。このたび私が伊能忠敬の高森測量のことを町の広報誌に掲載できたのは、実はこの日記に高森での測量のことが記されていたからでした。この史実を知って以来私は県や大学の図書館などに通って様々な関係資料の読み込みや蒐集を進め、さらに、測量が行われた草部、高森、色見、旧蘇陽、県境を越えた高千穂などに度々足を運んで、忠敬が200年前に測量した昔の道筋などの現地確認を行い、この地区での合計4日間の測量について、その詳しい内容を多くの

町民の皆様にお伝えしようと走り回ってきました。

しかし、先の12月号に書いたように、草部側から川走川へ下る道は大きな落石で人が通れなくなり、高森峠の昔の道筋はいたるところが明治期の県道建設時に寸断されたため、その後藪となって消えかかり、高森町内で忠敬の宿舎だった萬屋や隊員の宿舎の佐竹家並びに忠敬の健康状態を見守る為に付き添った古沢医師のご子孫の所在確認なども正確にできず、さらに、色見で宿泊した荒牧家と後藤家のご子孫の方々の所在なども町内を何度も隈無く歩き回り、多くの方々のご協力もいただきながらいろいろと調べましたが、忠敬生誕の地とは違って、高森では測量隊の動向を伝える史料が発見できず、忠敬の高森測量に関しては、残念ながら日記に書かれている以上のことはまだ十分には解明できていないのが現状です。高森にとっては歴史的な遺産とも思える200年前の忠敬の高森測量の道筋は、次々と新しい道ができたこともあっていたる所で人通りが全く絶えるなどして昔の道筋を確認できないところが多く、また宿泊した宿などについても関連資料による確認が出来ずにいます。例えば、高森から色見へ測量を行った道は11月号の実測経路図で示したように、現在の上町から高森郵便局と高森中学校の横を通り、第二高根切橋を渡り、高森高校野球グラウンド横を通って国道325号を踏切り、森林組合の横を抜け色見に一直線に向かう、むかし杉馬場往還と呼ばれた道だったことがやっと分かりましたが、この道は途中で採石場があって最近まで利用されていた道だったものの、現在は途中で行き止まりになっており、高森線が開通した当時は停車場（高森駅）への道として、戦時中には出征兵士を見送りに行った道として色見と高森の中心部とをつなぐ大変重要な往還だった事を知る人は、町うちにも色見地区にもだんだんと少なくなってきています。忠敬の測量に関しては、全国各地でその仕事ぶりや業績を顕彰し、詳しく記録に残しているところもたくさんありますが、高森ではこのように忠敬の高森測量に関する記録や足跡を標した往還の道筋などが失われたり次第に消え去りつつありとても残念でなりません。

私はこれまで10回にわたり高森を含む日本列島のいたる所の測量を行った「ご隠居伊能忠敬」の仕事ぶり等について、この広報誌をとおして町民の皆様にお伝えしてきましたが、昨年秋の高森高校文化祭での公開授業においても、3年生の皆さんに、忠敬の高森測量のことや、忠敬が農民や商人の若いころから「将来に対する計画や目標を明確に立て、それを必ず実現するという生き方」を強い意志（will）として持続していたことが、結果的に日本列島を歩き通しての測量と正確な地図の完成という大偉業の達成につながっていることを伝えさせていただきました。小・中学校の授業でも測量家伊能忠敬については学習しますが、武家中心社会の江戸時代にあって、一介の町人ながら列島の地図づくりに多大な貢献を果たしている忠敬が、苦難を踏破しつつ高森地域の測量も行ってたという郷土の歴史を、若い高校生の皆さんに是非記憶していて欲しいと願う教壇に立ったところです。

3月号につづく